

「ええじゃないか」の民衆運動（I）

渡 辺 良 智

目 次

はじめに

一、ええじゃないかの性格

二、ええじゃないかの先駆（以上本号）

三、ええじゃないかと民衆の意識

四、ええじゃないかと世直し

五、集合行動論からみたええじゃないか
むすび

はじめに

二百五十年以上の長きにわたった徳川幕藩体制も最終段階を迎えつつあった慶応三年（一八六七）夏から翌年春にかけて、武蔵から安芸（一説では筑前）までの日本の中枢部で一つの特異な騒乱状態が現出した。空から神仏のお札

などが降ってきたとして各地で民衆が乱舞したのである。そのときの囁し言葉からこの騒乱状態は「ええじゃないか」と呼ばれている。

まず、ええじゃないかの具体的様相をいくつかの地域についてみておこう。

大坂で十二月十三日にええじゃないかを目撃した英国の外交官サトウはつぎのように書いている。⁽¹⁾

大坂では市民が総出で、間近に迫った貿易の開始と同市の開港を祝って、お祭り騒ぎに夢中になっていた。「イイジャナイカ、イイジャナイカ」と、うたい、踊る、嗜着をきた人の山が、色とりどりの餅や、蜜柑、小袋、菓花などで飾られた家並みを練りあるく。着物は太抵緋縮緬だが、青や紫のものも少しはあった。大勢の踊り手が、頭上に赤い提灯をかざしていた。このお祝いの口実として、最近伊勢の内、外宮の名前の入ったお札の雨が降ったと言いはやされていた。

また、蘭方医坪井良信の十一月五日付書翰⁽²⁾で京都の状況を見ると、

十月廿二三日頃より、市中誰云トナク、其ノ町某ノ屋ニ某神某仏之御札天降レリト。……扱右御札ノ下リ候家ニハ、店前ニ神座ヲ設ケ、灯燭ヲ点シ、菓菜酒餅ヲ献備シテ之ヲ祭ル事、猶夷子講ノ如ク、親類朋友隣近之者ヲ招キ、酒宴ヲ開キ、店外ニハ大竹二本ヲ立テ、ノヲ飾リ、其町内或ハ同商売ノ者より之ヲ祝スルトテ、酒樽炭俵等ヲ飾リ積ム事、猶猿若町顔見世飴物ノ如シ。其町内中、燈ヲ掲クル事祭礼ノ如シ。而シテ多人数群ヲナシ、或ハ紅白縮緬ノ揃ノ半天ヲ着シ、或ハ銘々思付ノ装ヲナシ、娘ハ若衆トナリ、老婆ハ娘ニナリ、男子ハ女ノ服ヲ着シ、躍リ廻リ、誰ノ家ニテモ右御札ヲ飴リ置ク所え舞込、騒キ廻リ、市中ヲ狂ヒ行ク一群一群連続、其盛ナル事、祇園祭礼ナトノ比ニアラス。貧富大小ノ差別モナク悉ク商売ヲモ休ミ、家ハ空虚ニナシテ諸方騒キ廻リ、終日徹夜少シモ止ムコトナク、歌声如湧、大鼓拍子木ノ音雷ノ如シ。町方取締役人ナト、制シテモ一向ニ耳ニモ不入、却テ多人ニテ取囲、躍ヲ勸ムル故、コレモ不得止手躍ニテモテナシテ其場ヲ遁レ去ルナト、奇々妙々。市中ノ者不

残狂氣ノ如ク、七八日ハ丸デ夢中ニテ送日レリ。……又其謠ニ曰ク、カミハレ、カミハレ、ヤブレタラ、マタハレ、ヨイジャナイカ、ヨイジャナイカ、ヨイジャナイカ。

やや引用が長くなってしまったが、祭礼、仮装、踊りこみなどのええじゃないかの要素やその展開過程をよく表わしていると思われるので取り上げてみた。

つぎに地方の例では、十二月に阿波は「ええじゃないか」の声に埋まったといわれるが、

御降りの当家では神棚もしくは床の間を淨め御降りの物を安置し、煌々と燈明を献じ神酒・洗米・山海のしろものを供へて……礼拝した。一方、御降り祝ひの馳走をつくり近所合壁並に昵懇の人々を招いて振舞ひ、宴酣なるに及んでは客も家族も一斉に家鳴りを立て、狂踏した。……御降りのあるなしを問はず、次から次へ軒別に押し廻ることが一種の慣ひとなった。各戸とも亦それを無上に喜んで家督相応の酒肴を以て饗したから、人々は酔ひに委せ乱れに任せ、昼といはず夜といはず……騒ぎ散らした。「え、ぢゃないか」と踊ることにより總てが黙過せられた。……

勢見の金比羅宮に伊勢太神宮の大神が降臨されてゐるといはれ、殆んど阿波全体の人々が勢見へ……押し寄せた。……男が女に扮し女が男に装って、……踊るがごとく疾走するがごとく往来した。

そして、……氣の向いたとき氣の向いた家へ……踊り込んだ。踊りこまれた家には、それを家慶ある吉兆として相応に酒食を振舞ひ些かの無理無法を看過したから、此の踊りこみは暴若無人を極めるようになった。……

「ええじゃないか」と踊ることにより、庄屋・五人與は恐るゝに足らず旧家富豪も憚ることなかつたから、老も若きも幼きも性の如何を問題とせず、自由氣儘に扮装して吾れも吾れもと踊って出た。⁽³⁾

このように阿波では民衆は既成秩序を無視してええじゃないかと踊り狂っていた。

信濃では、下伊那郡田村村へ領主から出された祭礼許可状(十月二十七日付)によれば、⁽⁴⁾

此頃より当地一体諸神仏之札降臨と申事ニ而、百姓町人共多人数打寄囃子方等致し、又者異形之姿ニ而躍等相催シ、他之神社へ参詣、或者人家へ推参酒食等致し候哉ニ相聞以之外事ニ而、兼而追々御諭しも有之候得共今以不相止、狂氣同様の躰ニ而乱酒ニおよび無益ニ金錢遣ひ捨候よし

というような状況であつた。

このええじゃないかは幕藩体制崩壊期に発生したため、明治維新史家は体制崩壊において民衆の果たした役割という観点から注目した。世直しの一形態としてええじゃないかの意義を重視する見解⁽⁶⁾はあるものの大勢は消極的に評価している。ええじゃないか騒動の主体が都市や農村の下層民衆であり、富裕な農商家へお札を降らせて酒食の振舞いを強要することはあつたとしても、ただ踊り狂っているだけのアナキーなもので、一揆や打ちこわしのような明らかな目標や要求がみられなかつたので、消極的評価も当然であろう。ただ、ええじゃないかはナンセンス踊りから世ならし運動へ向かうとして、消極的、積極的評価はいずれかの側面しかみていないという意見や、ええじゃないか騒動の構造的性質を考慮すべきだという説もあることに注意しておきたい。

ところで、一般的になされているええじゃないかについての説明、すなわち歴史の転機に際して無力感、不安感をもつた民衆が狂乱に排け口を求めたというような説明⁽⁹⁾は正しいのであろうか。この説明では、ええじゃないかの本質はとらえきれないと考えられる。また、この説明では、民衆が一揆や打ちこわしでなく、ええじゃないかに向かつてはどうしてなのかは説明できない⁽¹⁰⁾という意見もある。

そして、歴史の転機に民衆はただ踊り狂っていただけなのだろうか。ええじゃないかを「グロ・ナンセンス」⁽¹¹⁾、狂喜舞と片付けてしまつていいのであろうか。

これらの点については、ええじゃないかに参加した民衆の意識や行動を検討してみないと十分答えられないだろう。さらに、歴史学者は、慶応三年から翌年にかけての幕藩体制崩壊期にええじゃないかが発生したという事実を重視

して、前年（慶応二年）の一揆や打ちこわしと対比させてええじゃないかを取り上げる傾向があるが、もうすこし長期的な視点が必要ではないだろうか。例えば、近世後期に民衆が踊狂のオージー状態を示したのはええじゃないかだけではなかったことにも注目すべきであろう。民衆の伝統的な意識や行動様式をも考慮に入れ、ええじゃないかに類似する現象をも検討して、ええじゃないかの特質を探る必要があるだろう。

本稿では、主として歴史学者の研究成果を利用しているが、民衆の意識や行動に重点をおいて、ええじゃないかのこれまであまり考究されていない側面を中心に考察してみたい。

一、ええじゃないかの性格

一般に騒動、踊狂などと表現されているええじゃないかであるが、各地の状況を見ると、その展開は、神仏のお札やお拔などが天から降ったとする「お札降り」の段階と、それをよい機会として民衆が乱舞⁽¹³⁾踊狂する「ええじゃないか」の段階とに分けられる。江戸ではお札降りはあったが、民衆の乱舞はみられなかった。もう少し細かくみれば、(1) 降札、(2) 祭礼、(3) 参詣、(4) 祝宴、(5) 騒動（乱舞）となる。また、この騒動は、(1) 「お札降り」を契機として、その祭りの踊りとして展開し、(2) 異装・盛装の男女がそれぞれの地方特有の囃し言葉⁽¹⁴⁾によって、群をなして踊り歩き、(3) 有力豪農商からの金品施与を強要し、(4) その強要は豪農商家への「おどりこみ」の可能性を強くもっていた⁽¹⁵⁾、と「施与の強要」を強調する見方もある。

一九六〇年代までのええじゃないか研究を集大成した西垣晴次氏は、ええじゃないかの直接的要素として、(1) 神符類の降下（発端）、(2) 空より降下した神符類を祀る、(3) 数日にわたる祝宴、(4) 人々の男装と女装にみられる日常性の否定、(5) ええじゃないかの歌と踊り、(6) 領主の命令・指導による平静化（終末）、(7) 背後にあった扇動者の存

在、をあげている。⁽¹⁷⁾ (4) (7) 以外はまたええじゃないかの発端から終末までの展開過程を示しているとも考えられる。彼はさらに (8) 世直しへの意識と期待、(9) 神符の降下により、ひきおこされた数回の伊勢神宮への「おかげ参り」の伝統、(10) 男装・女装にもかかわってくるところの、「ええじゃないか」の歌にもっともよく示されている猥雑さ、といった民衆の意識にねざした三要素もあげている。⁽¹⁸⁾ だが、四年後の著書では、(一) 神符類の空よりの降下、(二) 降下した神符類を棚をしつらえ祀る、(三) 浪費と無銭飲食行為が表裏一体のものとしてみられる祝宴、(四) 人々の非日常的な行動、(五) 人々を非日常的な行動にかりたてる踊りと「ええじゃないか」の囃し言葉の大合唱、(六) 地域ではほぼ三ヵ月を限度とし、また降下のあつた家では三日三夜あるいは七日間という一定の期間祭る、の六要素で構成されていたとする。⁽¹⁹⁾ 前著の (6) 以下が削除され、新しく (六) が追加されているのである。(6) 以下については、領主の命令がでてもええじゃないかがやまなかつた地域もあるし、扇動者、仕掛け人は降札の別の側面とも考えられるし、世直し意識がええじゃないかに参加した民衆にどれだけあつたか問題がある。また、ええじゃないかと伊勢神宮へのおかけ参りとの直接的関連は小さいと考えられるし、⁽²¹⁾ 猥雑さについてもええじゃないかに特有のものでなく、祭礼などのハレの日やオージー状態につきものだという指摘もある。これらの点を考慮すれば、(6) 以下の削除と (六) の追加は妥当なところであろう。ただ、(四) 人々の非日常的な行動、というだけでは、裸まいり、男装、女装、華美な衣裳で踊り歩くこと、猥雑さ、などの異常さは薄れてしまう。

ところで、西垣氏はええじゃないかの祭礼としての側面を重視し、施与の強要については無銭飲食行為と穏やかに表現している。ええじゃないかは、普通の祭りとは異なり、既成の秩序を否定する性格をもっているとする立場とは見方が異なるように思われる。⁽²²⁾

さらに、ええじゃないかは降札、祝祭、それが過熱して民衆の狂喜乱舞へと展開していくのであるが、都市部と農村部とを比べると、後者の方が、日常的な秩序を否定しようとする民衆の衝動の爆発は不徹底であつた⁽²³⁾と考えられる。

農村部の方が共同体として統制がとれていたからであらうし、町・宿方から起こり、町・宿方を通じて伝播しているええじゃないかは、基本的には都市民の運動であったからかもしれない。とにかく、地域の秩序を維持しつつ祭礼をとり行ったところ（信濃・高遠⁽²⁵⁾）から一揆や打ちこわしに近いところ（安芸・竹原下市⁽²⁶⁾）まで、ええじゃないかは多様な様相を示している。そして、都市と農村の差異のみならず、発生時期により、ええじゃないかの性格は異なるという説もある。佐々木潤之介氏は四段階に分けている。⁽²⁷⁾すなわち、(1) 六月はじめから京都、ついで大坂ではじまり、六月下旬に大垣にまで及んだという豊年踊り、これはあいの手に「ええじゃないか」をいれ、長州軍の上京を期待する文句を入れて踊る「ええじゃないか踊り」であった。(2) ええじゃないか運動の始まりから九月半ばまで、降札を祭り、施与、抜参りが基本の形でまだ乱舞はみられない。(3) 九月半ば以降、運動が地域的に広がり、乱舞がみられ、囃しには「世直し」が登場し、「おどりこみ」の可能性も強まった。豊年踊りと降札祝祭とが世直し伝承に媒介されて結びついた段階。(4) 十月中旬から翌年正月まで、世直し踊りに政治性がつけ加えられた。政治運動化といえる。佐々木氏のこの段階分けは一つの整理の仕方であり、興味深いが、七月に東三河に発生したええじゃないかが、距離に比例して東西に伝播していったと必ずしも言いきれないので、このようにすっきり分けられるか疑問が残る。前述の高遠の祭礼は十月下旬に行われているのである。

このように、ええじゃないかは地域的にまた発生時期により多様な様相を示している。それでも、ええじゃないかは、祭り、踊り、振舞いの強要、といった共通の性格をもっていると考えられる。

二、ええじゃないかの先駆

ええじゃないかは幕末維新期に多数の民衆を熱狂の渦に巻きこんだが、実は、この種の熱狂的に民衆の参加した現

象は、江戸時代にしばしばみられたのである。まず、慶長十九年（一六一四）に伊勢に始まり全国に広がった伊勢踊りがある。この踊りは翌元和元年まで続いた。その後、寛永、延宝、正徳年間と繰り返して発生している。この伊勢踊りは、天からの降下物がある、きらびやかな装束で五、六日つづけて踊る、村送りの形で広がっているなどええじゃないかの原型とも考えられるが、ええじゃないかとは時間的に離れすぎているので、これ以上言及しない。ついで民衆が短期間に伊勢神宮に群参するおかげ参りが考えられる。宝永二年（一七〇五）、明和八年（一七七二）、文政十三年（一八三〇）とほぼ六〇年ごとにおかげ参りがあった。文政時には半年の間に四百万人もが伊勢神宮の参詣に出かけている。信仰心からでた者もいたであろうが、封建的な抑圧された日常生活から解放された、旅という非日常的世界の求めて多数の老若男女が参加していった。路銀のない者は途中での施行をあてにして出かけた。伊勢神宮の神符の降下が群参の契機となったという点はええじゃないかと共通であるが、文政のおかげ参りからええじゃないかまで三十七年しか経っておらず、ええじゃないかでは伊勢参宮よりも地域の社寺参詣が通例なので、ええじゃないかをおかげ参りの変形と考えるのは無理がある。本稿では、一九世紀前半の四つの踊りに注目してみた。それは、おかげ踊り、大坂の砂持、豊年踊り、御鑑祭である。

一 おかげ踊り⁽³¹⁾

おかげ参りの熱気もさめやらぬ、文政十三年四月下旬から翌天保二年十月にかけて、河内、大和、摂津などの畿内と播磨ではおかげ踊りが、村から村への踊りかけで流行した。初期のものが施行おどりと称されたことから、おかげ参りの施行場の興奮状態の中から生まれたのであろうし、文政十三年に大和、河内が豊作だったために踊りが始まったともいわれる。「いせの天神さまがおどれとおさる おとら世の中よふなおる」「おかげおどりはあくまをはらふ、ところ宝ねん神いさめ」といわれたように、踊ることによる世直し、豊年を期待する民衆の意識がうかがわれる。

『浮世の有様』によれば、踊りの様子はつぎのようなものであった。

羅紗・天鷲絨の昇立、金の御幣に揃の衣裳、三味線・太鼓・笛・鼓、二百・三百一群れに、御蔭躍と名を付けて、其振付は難波より、数の金に迎へつつ、われおどらじと村々の、おこれる衣裳花やかに、躍りながらの伊勢参り、御禮参と云はやし、おとこ女の差別なく、老も若きも一やうに、年の貢も其儘に、浮れ歩行。

最初は泊りがけで踊り回っていただけであったが、次第にエスカレートしていった。年貢や掛け払いを無視したり、かま留といって耕作を放棄したり、枚方付近の村では年貢減免を認めさせたりした。また豪農商家へ押しかけて酒食の振舞いを強要している。このおかげ踊りは、町や村の共同体を単位として行われ、「一統のことなれば不参すべからず」のように参加への強制力をもっていた。しかも「躍らざる者は一族厄病に死し、又は其家焼失せぬる」などの風聞もあったので踊りに加わらざるをえなかった。

支配者側では踊りを禁ずる旨の法度を出したが、民衆は無視して踊り続けた。取締りが強化されてからお拔が降下して踊りが続けられた。

おかげ踊りの性格については評価が分かれている。年貢減免の要求や耕作放棄、さらには酒食の振舞いの強要などがみられたことから一揆に等しい反封建的性格をもっていたと評価する説と、踊り込み、酒食の振舞いの強要などは村祭などにはつきものであり、一揆や打ちこわしのような政治、経済的目標を設定し、それに向けて行動することはなかったという説とがある。

おかげ踊りは突発的に群衆が狂乱乱舞するものではなかった。「明七つ時、氏神の社にて太鼓を打、一統是を相図に飯を焚、二度めの太鼓にて勢揃をなし、未明より三番目の太鼓にて躍り出」⁽³⁶⁾たし、振付師をよんである期間練習し、さらに衣裳を揃えて踊っているのである。大和では「講中」のように踊り集団を組織して整然と踊ったと考えられる⁽³⁷⁾。また、一部の地域では男の女装、女の男装もみられたので、おかげ踊りにはええじゃないかと共通点が少なくない。

二 大坂の砂持

大坂ではおかげ踊りは流行らなかったが、民衆は砂持に熱中していた。砂持というのは社寺の建築などのとき土砂を運ぶ仕事に加勢することであるが、大坂には民衆が砂持に熱中する特殊事情があった。江戸時代の大坂は諸国物産の集散地で大名の蔵屋敷が立並び、「天下の台所」として繁栄した。淀川、安治川などの河口に位置し、舟運に好都合だったのである。だが、これらの河川は長年の間に上流から運ばれてきた土砂が川底に堆積して洪水をひきおこしたり舟運の妨げになったりしたので、時々川浚い（浚泄）⁽³⁸⁾せねばならなかった。大坂の民衆は川底に堆積する土砂はケガレと、川浚いはケガレを取除き再生する儀式と意識したのであるう、浚った土砂を晒して神社に砂持するときはお祭り騒ぎとなった。大坂では幕末に砂持が頻発しているが、寛政元年（一七八九）の玉造稻荷の砂持が火をつけた。

寄進持参之節、大勢申合、鉦・太鼓・三味線などを加へ、練もの同様之躰に而、着用物等も右二事よせ目立候類有之、揃桃灯等を燈し及深更候迄外町々をも徘徊いたし、且右ニ付彼是異説を申触し人氣を迷し候族も有之趣相聞、不埒之事

と大坂城代の口達⁽³⁹⁾が出てゐる騒ぎはやまず、一週間後により厳しい達しが出て漸くやんだ。民衆は町ごとに競い合つて俄練物を出し、華美な衣裳で練り歩いた。「宝年じゃ宝年じゃ、世の中直ぐ宝年じゃ」とか「砂持せぬ者鼻黒じゃ」とか「鍋釜売つても砂持じゃ」などと掛け声をかけて騒いでいた。⁽⁴⁰⁾

そして、天保二年（一八三一）に淀川筋一帯を川浚いした「御救大浚」では騒ぎはさらにエスカレートしている。『浮世の有様』によれば、⁽⁴¹⁾

御手伝人足丁々騒ぎ立、……皆一様の揃ひの半てん・股引・板／ちりめん・ひろうと等の手掻・手すきに、花笠をかむれる有。又は思ひ思ひに花美を盡し、何れも目を驚かされる出立也。……幟を船に押立五色の吹貫吹流し、

何れも四五間も有ぬ。……仰山なる出しをつけ、鉦・太鼓にて囃し立、二三日も手前より大坂中を躍り歩行て、其日になりぬれば、多の船にて押行様、さながら船軍の如しといつたありさまで、見物人も群集した。

足揃えといつて加勢に出る前から揃いの襦袢を着て町中を徘徊すること、踊り歩くこと、華美な衣裳、鳴物などが禁じられると、砂持に出る者は減少した。砂持よりも踊り歩くことが民衆の目的だったのである。そこで翌年の砂持は賑々しく行われたという。

天保九年（一八三八）には、四月下旬から天満天神、翌閏四月下旬から猫間川、五月には御霊神社、六月には座摩神社と砂持が続き、民衆は大浮かれて踊り狂った。

『浮世の有様』に猫間川砂持の様相をみると、⁽⁴²⁾

千も二千も紅摺の鉄炮・襦袢・同じき股引をはき、五色縮緬の玉たすきをかけ、紅摺手拭の鉢巻なし、又は種々の細工物を頭に戴き、中には羅紗・猩々緋・天鷲織錦・縮緬等の衣服を着用し、鉦・太鼓にて囃子立、一統にまけなよまけなよといへる掛声にて、一群々々走行……

砂持をなす……遙前より大騒に騒ぎ立、一日は足揃、二日目足固めなど名目を付、三日斗は大勢一群に成て、大坂中を負けなよ負けなよと掛声して走廻る。

弘化二年（一八四四）の生国魂神社の正遷宮でも、民衆は様々に仮装し、女は男に、男は女になって踊りまわるといった状況であった。⁽⁴³⁾

このように、近世後期大坂の砂持では、町ごとの市民参加による練物や囃、仮装、踊りがつきものになっていた。⁽⁴⁴⁾『浮世の有様』は「大坂に於ては船付にて人氣騒々敷、至てはしたなき所なるゆへ」砂持のような馬鹿騒ぎも常のことであるが、としている。尤も天保九年の砂持については、大塩平八郎の乱の後で人心収攬のために支配者側が

奨励したとの風説があった。⁽⁴⁶⁾

三 豊年踊り⁽⁴⁷⁾

ところが、伝統的、保守的な人の多い京都においても似たような狂乱状況がみられたのである。

天保五年（一八三四）正月、伏見の稲荷神社で狐が豊年を予言して踊っているという噂が広まり、京中から参詣者が殺到した。そして、天保十年（一八三九）三月から奇妙な踊りが京都に始まった。『浮世の有様』によれば、⁽⁴⁸⁾

三月廿八日より、京都仏光寺にて為拜と唱へ、宝物をかさり付て人寄をなす。然る所京都一円、市中も遊里も悉く浮れ立、衣裳に美麗を盡し、羅紗・猩々緋・天鷲絨の類を揃ひにて着かさり、男女混雜し貴賤の別なく昼夜踊り歩行、百人も二百人も一群に成て、大道は申に及ず、見ずしらずの人の家へ、遠慮えしやくもなく土足にて走入り、無法に躍れる有様、何れも乱心の如し。

この踊りは、京師踊り、蝶々踊り、赤踊りなどとも呼ばれているが、一般には豊年踊りと称している。天保四年から六年までの凶作、七年の大凶荒、八年二月の大塩平八郎の乱、と続き、九年はますますの作柄であった。翌年春、豊作を希求する民衆の願いが踊りの形で噴出したのであった。⁽⁴⁹⁾ おかげ踊り、天保九年の大坂の砂持の影響も十分考えられる。

豊年踊りはおかげ踊りと異なり、「踊れ踊れ踊らにや損じゃ 踊るあほうに見るあほう 同じあほなら踊るがかちじゃ まけなまけなちよとせちよとせ」などと叫んで、合いの手は「チョウチョウ」といい、ただ手足を動かすだけの踊りであった。「チョウ」は兆の意で豊年の吉兆を表わしていた。京都中から踊り手が出て見物人もあふれ、踊らないと道の通行もなり難かったという。

踊り手は「女ハ男ニ成男ハ女ニ成、江戸腹当ニ緋鹿子之はっち、同じ足袋、同じ手拭、大体皆半てんはっち皆々着

し⁽⁵⁰⁾」とか、遊女などは「男の褌をしめ、紺絞りの襦袢に緋縮緬のしごき帯、五色の褌に緋鹿子のばっち足袋、頭には豆絞りの手拭という男姿⁽⁵¹⁾」になり、腰には鈴と鳴子（すずなりの意）をつけて踊り歩いた。派手な衣裳とともに様々な仮装がこの踊りの特徴である。『蝶々踊り図巻』には、若衆、丁稚、僧侶、武士など人間のみなならず、動物、昆虫、鬼、天狗などの姿で踊っている民衆の姿が描かれている。雨⁽⁵²⁾が降っても踊りはやまず、即興で蛙や案山子に仮装して踊り続けた。金持ちには一人で三〇両、五〇両もする豪華な衣裳で踊りに出た者もあったが、貧しい者は裸に入墨して踊りに出た。

こうして、老若男女あらゆる階層の民衆が昼夜狐のついたように踊り回ったが、やがて路上での踊りから遊所、豪商、大家へ押しかけ、座敷へ土足のまま踊り上るようになった。これらの家では畳を裏返し上敷きを敷いて防ごうとしても効果はなく、酒肴を出してもなすところも出てきた。

はじめは踊りを黙認していた奉行所は「夜中まで踊り歩き、人家座敷まで土足にて立入るのは理不尽」と達しを出したが、踊りはやまず、見咎次第召捕えろとの通達が出て漸くやんだ。

民衆は豊年踊りを踊り回ることによって抑圧されていたエネルギーを放出した。豊年踊りには、華美な衣裳、仕事を休んで踊り廻る、踊らないと通行させない、振舞いを強要する踊り込み、土足のまま座敷に上がるなど日常的道德の無視、といったええじゃないかと共通する要素が多い。豊年踊りは乱舞による民衆の熱鬧という点でええじゃないかと本質的に差のないものであった。⁽⁵³⁾

四 御 鑑 祭

美濃、飛騨、尾張、三河、遠江といった東海地方では御鑑祭が、二つの系統で六〇年おきに流行した。神祇の鑑が村送りの形で伝えられ、五穀豊熟を願う祭りが、行われるのである。⁽⁵⁴⁾

文政十年（一八二七）の名古屋の御鑑祭について『猿蓑庵日記』の九月の箇所につぎのように書いてある。⁽⁵⁵⁾

在々御鑑祭り有、いろいろねり物類ひを作りて賑合し、六十一年目に有事の由。来年、豊年の由、佳瑞也といふ。
……村々を廻りて祭る。勢州の御師より其村々へ送る桑の木を以て、鑑の形を作り、并、榊の枝を添える。是を
神体として、馬に乗せ、或は新しき神輿（白木）に納め行列し、其所の氏神へ納める事也とぞ。

十月には祭りは次第に華美になつてゐる。⁽⁵⁶⁾

御鑑祭、次第に花美・風流を尽す。其中に、当月朔日、押切、二日古渡は、格別、見事にして、見物群集夥し。
いつかたも酒のせつたいをなして、往来人に進む。此行粧は、御鑑神の御こしを先に立て、あとより、様々のね
り物を出し、道すから、おとりをする。実は大壮観といふべし。

さらに、数ヶ村では派手になりすぎた祭りの催しが役所より止められるような状況であつた。十一月十四日には市中
の熱田伝馬町で御鑑祭りが行われたが、

三丁の間、造り花の桜と紅葉を町々にかさり、いろいろの投物の棚をかき、手ぬくい・盃、或は扇にさまざまの
品の配符を書、なける。

とあり、踊りに熱中している民衆の図が添えられている。⁽⁵⁷⁾

こうして、名古屋とその周辺においても民衆は豊年祭としての御鑑祭に熱中していたことが確認される。だが、畿
内、大坂、京都、名古屋のように民衆が熱狂する状況は一九世紀の日本では珍しいことではなかったと思われる。管
見では、阿波・徳島では天保期以降、例年祭礼、見せ物に見物人が群集している。⁽⁵⁸⁾ 遠江・新居宿では嘉永五年（一八
五二）の雨乞い行事に町内、周辺村落から多人数参加して大騒ぎとなり、往来の旅人に酒を振舞つて台引・笹踊を行
うなど騒乱状態となつた。⁽⁵⁹⁾ 伊豆・三島大明神の地突き（万延元年・一八六〇）、二年後の鳥居引きと勸進大相撲には
民衆が群集して大賑わいであつた。⁽⁶⁰⁾ また、慶応元年（一八六五）に東播磨では「稻荷踊り」が流行している。⁽⁶¹⁾

こうした状況は他所でもみられたであろう。ええじゃないかと民衆が踊り出すには何らかのきっかけさえあれば十分であった。

(続く)

注

- (1) アーネスト・サトウ(坂田精一訳)『「外交官の見た明治維新(下)」岩波文庫、一九六〇年、八六頁。
- (2) 明治維新史料研究会・宮地正人編『幕末維新風雲通信』東京大学出版会、一九七八年、三一四～五頁。
- (3) 山口吉一『阿波え、ぢゃないか』徳島史学会、一九三二年(一九七一年複製)、一三～五頁。
- (4) 鈴木ゆり子『幕末の民衆運動』『歴史評論』四八五号、一九九〇年、一三～四頁。
- (5) 例えば、津田秀夫は、エエジャナイカ運動を慶応二年の人民闘争の極限状態としてとらえている。同著『近世民衆運動の研究』三省堂、一九七九年、九三頁等参照。
- (6) 西垣晴次『ええじゃないか——民衆運動の系譜』新人物往来社、一九七三年、二五三頁、高木俊輔『ええじゃないか』教育社歴史新書、一九七九年、一三三頁等参照。
- (7) 松本 博『「ええじゃないか」運動の社会的基礎』『徳島地方史研究会創立十周年記念論文集 阿波・歴史と民衆』南海ブックス、一九八一年。
- (8) 中川秀武『「ええじゃないか」騒擾の位相』『甲斐路』二六号、一九七五年。
- (9) 例えば、H・ノーマンは「これまでしっかりと抑えつけられていた民衆の感情がこの熱狂に排け口を求めた」という。
(H・ノーマン(大窪憲二編訳)『クリオの顔』岩波文庫、一九八六年、一六六頁)。また、遠山茂樹によれば、「彼らは自ら暗示を作り出し、自らこれに反応し、ただわけもなく大声を発し、手足を舞わし、役人の制止をふりきり、敵視する富家を土足でふみにじって、『ええじゃないか』の一語に、現実の一切を放下して『世直し踊』の夢幻の世界の自由に酔いしれた。」
(遠山茂樹『明治維新』岩波全書、一九五一年、一八九頁)。
- (10) 『和歌森太郎著作集五 日本風俗史』弘文堂、一九八〇年、三五八頁。
- (11) 土屋喬雄『日本社会経済史の諸問題』平凡社、一九四七年、第八章。

- (12) 西垣晴次「神々と民衆運動」毎日新聞社、一九七七年、九一―一二頁。
- (13) 高木俊輔、前掲書、一二頁。
- (14) 渡辺和敏「ええじゃないか」における情報の伝播と住民の対応」『日本史研究』三〇六号、一九八八年、三二頁。
- (15) 「ええじゃないか」の囃し言葉は伊勢、近江以西でしか、駿河、信濃などでは「六根清浄」「このおかげさん」といっている。(高木俊輔、前掲書、一六頁。)
- (16) 佐々木潤之介「幕末の社会情勢と世直し」『岩波講座日本歴史二三 近世五』一九七七年、二七四頁。
- (17) (18) 西垣晴次「ええじゃないか」二四―五頁。
- (19) 西垣晴次「神々と民衆運動」八九―九〇頁。
- (20) 降札については、「あるいはいう、この御札降りは京都府の人々が人心を騒擾せしむるために施したる計略なりと。」(福地源一郎「懷往事談」)のように、倒幕派の仕掛け説が、一般に信じられているが、東国から西国までの広い範囲の降札は、一般民衆の関与なしには不可能である。尤も討幕派がええじゃないか騒動に便乗したことは十分考えられる。
- (21) 安丸良夫「おかげ参り」と「ええじゃないか」『日本思想大系五八巻 民衆運動の思想』岩波書店、一九七〇年、四九六頁、相蘇一弘「踊る民衆と幕末社会」『大系・日本歴史と芸能一〇巻、都市と祝祭』平凡社、一九九一年、八二頁等参照。
- (22) 田村貞雄「ええじゃないか始まる」大月書店、一九八七年、五〇頁。
- (23) 同書、七六頁。
- (24) 佐々木潤之介、前掲論文、二七五頁。
- (25) 三輪憲昭「信濃「ええじゃないか」の「様相」『信濃』四一卷三三、一九八八年、を参照。
- (26) 豊田寛三、頼祺一「幕末期における階級構成と階級闘争」『歴史学研究』三五九号、一九七〇年、一四頁。
- (27) 佐々木潤之介「世直し」岩波新書、一九七九年、一〇一―一三頁。
- (28) 田村貞雄、前掲書、参照。
- (29) 西垣晴次「神々と民衆運動」参照。
- (30) 相蘇一弘「おかげ参りの実態に関する諸問題について」西垣晴次編「伊勢信仰Ⅱ」雄山閣、一九八四年、矢野芳子「おかげまいり」と「ええじゃないか」青木美智男他編「一揆」東京大学出版会、一九八一年、等参照。
- (31) おかげ踊りに関しては、以下の文献によっている。川合賢二「天保のお蔭踊りと村政改革」『ヒストリア』七六号、一九

七七年、同「大坂地方におけるお蔭参りとお蔭踊り」『歴史手帖』一二巻七号、一九八四年、中島三佳「文政十三年のお蔭踊りについて」『地方史研究』一六八号、一九八〇年、岩井宏美「お蔭踊り私考」『芸能史研究』二九号、一九七〇年、同「大和の「お蔭参り」と「お蔭踊り」」『大和文化研究』一五巻三号、一九七〇年。

(32) 『日本庶民生活史料集成』一一巻、三一書房、一九七〇年、一三八頁。

(33) (36) 『日本思想大系五八巻 民衆運動の思想』三六一頁。

(34) 遠山茂樹「近世民衆心理の一面」歴史科学協議会編『農民闘争史(下)』校倉書房、一九七四年、二六三頁。

(35) 岩井宏美「お蔭踊り私考」三八頁。

(37) 岩井宏美「大和の「お蔭参り」と「お蔭踊り」」一四頁。

(38) 岩井宏美『地域社会の民俗学的研究』法政大学出版局、一九八七年、一九五頁。

(39) 小林 茂「封建制崩壊期における畿内農民のイデオロギーの展開」『農民闘争史(下)』二八三頁。

(40) 福原敏男「寛政元年玉造稻荷社砂持一件」『歴史手帖』一三巻六号、一九八五年。

(41) 『日本庶民生活史料集成』一一巻、二二六頁。

(42) 同書、四八五頁。

(43) 相蘇一弘「踊る民衆と幕末社会」六八頁。

(44) 同論文、六九頁。

(45) (48) 『日本庶民生活史料集成』一一巻、五三九頁。

(46) 同書、四八四頁。

(47) 豊年踊りに関しては、以下の文献によっている。栗田元次「豊年踊」『歴史地理』二五巻四号、一九一五年、長谷川伸三「天保十年「京都豊年踊り考」西山松之助先生古稀記念会編『江戸の民衆と社会』吉川弘文館、一九八五年、同「京都豊年踊りと天保期畿内の社会情勢」津田秀夫編『近世国家と明治維新』三省堂、一九八九年、鎌田道隆「民衆運動としての天保踊」『芸能史研究』五四号、一九七六年、相蘇一弘「踊る民衆と幕末社会」。

(49) 栗田、前掲論文、七八頁。

(50) 鎌田、前掲論文、七八頁。

(51) 栗田、前掲論文、七五頁。

- (52) 相蘇、前掲論文、七三頁。
- (53) 鎌田道隆「『おかげまいり・ええじゃないか』考」『芸能史研究』四三号、一九七三年、四頁。
- (54) 御殿祭はええじゃないかの発生と関連があるといわれている(田村貞雄、前掲書、参照)ので、ここに取り上げたが、御殿信仰については、西垣晴次「神々と民衆運動」を参照。
- (55) 『日本都市生活史料集成四 城下町編Ⅱ』学習研究社、一九七六年、六四六頁。
- (56) 同書、六四七頁。
- (57) 同書、六四八頁。
- (58) 松本 博、前掲論文、三二一～四頁。
- (59) 渡辺和敏「近世後期における宿駅住民の行動様式」村上直先生還暦記念出版の会編集『日本地域史研究』文献出版、一九八六年、四六一～二頁。
- (60) 高橋 敏「幕末民衆の情報と世直し意識の形成」『静岡県史研究』二号、一九八七年、一〇二～三頁。
- (61) 阿部真琴「『ええじゃないか』の民衆運動」大阪歴史学会編『近世社会の成立と崩壊』吉川弘文館、一九七六年、一九一頁。